

埋文よこはま 6



財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター 平成 14 年 9 月 30 日発行

中世のお墓と墓地

— 上台の山遺跡と上の山遺跡の発掘から —

お墓や墓地を調べるなどというと、「縁起が悪い」とか「気味が悪い」などと思われがちです。しかし私たち遺跡を調査・研究する者にとっては、それらもまた住居やムラ跡などと同じように当時の様子を知る重要なものなのです。都筑区の港北ニュータウン地域の遺跡では、縄文時代から近世・近代にいたるまでの多くのお墓や墓地が調査されました。

ここではその中のごく珍しいものを紹介します。発見されたのは、都筑区仲町台3丁目付近にあった「上台の山遺跡」と「上の山遺跡」という2つの遺跡からでした。

上台の山遺跡の方形環濠墓

上台の山遺跡から見つかったのは、方形環濠墓と名付けたお墓です。一辺が10mほどの方形になるように溝で四角く区画したもので、西側の溝の中央は途切れて出入り口となっていました。区画の中には土器を入れた3個の穴があり、骨壺が中に埋められていました。最も残りの良い北西側の穴の中には、捏ね鉢で蓋をした壺と甕が埋められており、また、中央には甕が、南東側には壺が埋められていました。どれにも骨は入っていませんでしたが、いろいろと検討した結果火葬骨を入れる骨壺と考えました。使われていた土器は、常滑窯で焼かれた甕と捏ね鉢、渥美窯で



蔵骨器の出土状態



遺跡の場所

焼かれた壺で、形の特徴から作られた時代は13世紀前半の頃とわかりました。お墓が作られたのも同じ頃で、ちょうど鎌倉時代の初めの頃と思われます。おそらく骨壺の上には簡単な土盛りがされていたのでしょう。

上の山遺跡の中世墓地

上の山遺跡からは大きな墓地が見つかりました。この墓地は大量の板碑を伴っていて、後世にほとんど壊されることもなくほぼ全体の様相がつかめた大変貴重な例です。

墓地は台地先端部の南西側斜面を、幅がおよそ14.5m、奥行き4～6mほどの広さに平らに削って造られており、そこから50個の墓穴と28個体の人骨が見つかりました。

50個のお墓は大きく土葬墓と火葬墓に分けることができます。土葬墓は径1mほどの穴を掘り直接遺骸を入れたものです。一方、火葬墓は3つの種類に分けられます。まず火葬骨を蔵骨器に入れて埋葬したものが、容器には常滑窯

の他、曲物や布袋なども使われたようです。また、蔵骨器に入れず径1mほどの穴の中に直接火葬骨を入れたものがあります。さらにもう一つ、穴の中で火葬にし、そのまま埋めてしまっているものがあります。中には遺骸を西に向けて合掌した姿勢に寝かせ、その上に薪を積んで火葬にしたこ



上台の山遺跡 方形環濠墓

とがわかる例もありました。

この墓地からは様々なものが発見されています。まず、たくさんの板碑があります。また、五輪塔と呼ばれる石塔も見つかっています。まわりからは灯明皿に使われたかわらけ、刀の飾り金具の目貫が、またお墓の中からはかわらけや皿、火箸、銭、数珠などが発見されました。中でも全国的にみて大変珍しいものに握り飯があげられます。蒸し焼き状態になったものらしく、燃料に使われた木の枝や葉、竹、草などや数珠玉と一緒に炭になっていました。ちょっと大きめの握り飯で残念ながら割れてしまいましたが、そのおかげで中に銭が3枚入れているのがわかりました。銭入りの握り飯は他に発見例が無く、今のところ唯一のものです。



方形環濠墓出土の土器

墓地には墓穴だけでなく他の施設も作られています。前には溝が掘られ墓地を区画しています。また、墓が作られた平地より一段高いところに小石を集めた場所が見つかりました。鉄釘が散らばっていることから、石積みの上に小さな祠でも建っていたのでしょうか。供養のために石を積むところだったと思われます。

この墓地は、板碑に刻まれた年号や出土した土器の特徴から、14世紀の前半に作られ初め、14世紀の終わりから15世紀の前半にピークを迎え、15世紀の終わり頃に使われなくなるという変遷をたどることがわかりました。南北朝時代から室町時代の中頃にかけての頃にあたります。

お墓の主はだれ

これらのお墓を作ったのはどんな人たちなのでしょう。方形環濠墓については葬られた人の手がかりはありません。一方、上の山遺跡から出土した人骨を鑑定した結果は、男性・女性がほぼ同数で、年長者も含めた大人のものばかりでした。幼児や子どもが含まれていないのは骨が弱く残り



上の山遺跡の中世墓地

にくいためとみられ、本来は大人から子どもまで男女の別なく葬られた家族墓と考えられます。方形環濠墓の骨壺に渥美窯や常滑窯の陶器類を使用し、こうした規模の墓を作ることができるのは、ある程度の財力や権力を持った人々で、おそらく武士階級の人と思われる。同じように上の山遺跡の中世墓地に見られる大量の板碑や刀装具などは、埋葬された人々が農民層ではなく地域に勢力を持っていた武士階級であることをうかがわせます。鎌倉時代の御家人と呼ばれる武士団の中に、鴨志田とか荏田、都筑、寺尾など、鶴見川流域の地名と結びつく名があり、大熊町の周辺にもこうした武士団がいたものと思われる。また、南北朝の頃から室町時代にも在地の武士団は存在しており、そうした人々が上の山遺跡の集団墓を作ったのでしょう。

墓地の作られた頃

この地域の鎌倉・室町時代の歴史については実のところよくわかっていません。文字による記録もほとんどなく、「吾妻鏡」など記された地名や人名を断片的につなぎ合わせて考えるしかありませんでしたが、このお墓や墓地が見つかったことで、当時の様相を知る貴重な情報を得ること

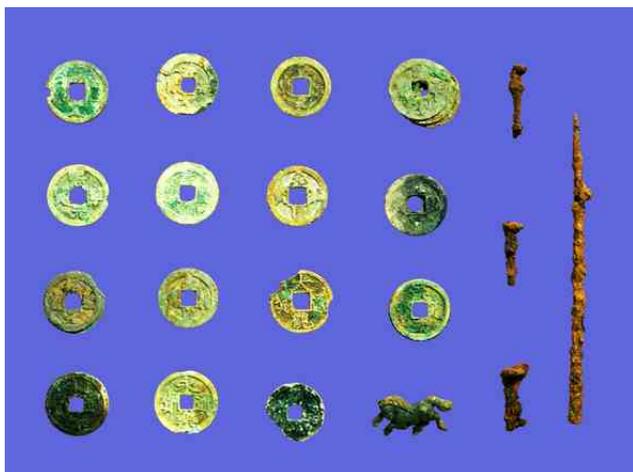


墓穴と板碑等の散らばる様子

ができました。方形環濠墓は、実際にこの地
に出現した武士団の存
在を示すものであり、
上の山の中世墓地は、
南北朝の対立抗争から
室町時代にかけての、
関東地方で起こった数々
の争乱の時代に生きた
人々の存在を物語って
います。一方でこれら
の人々の住居など生活
をしていた場所はまだ
わかっていません。周
辺の調査が行われる機
会があれば、あるいは
もう少し詳しいことが
わかるのではないかと
期待しています。

さながらお墓の
博物館

両遺跡ではこれ以外にも違う時代の様々なお墓がみつ
かっており、さながらお墓の博物館といった感じです。まず5
世紀の後半から6世紀初頭にかけて、上の山遺跡の4基の
古墳が造られました。次に6世紀の後半の土壌墓が上の山
遺跡に3基、次いで7世紀の終わり頃から8世紀の初めに
かけてのころに横穴墓が両遺跡に合計5基、さらに8世紀



墓地出土の銭・目貫・釘・火箸

の後半から9世紀の前半にかけ、上台の山遺跡に4ないし
5基の火葬墓が築かれました。その後は最初に紹介した方
形環濠墓や中世墓地が造られることとなります。

これらのお墓は数十年から数百年という間が空いていま

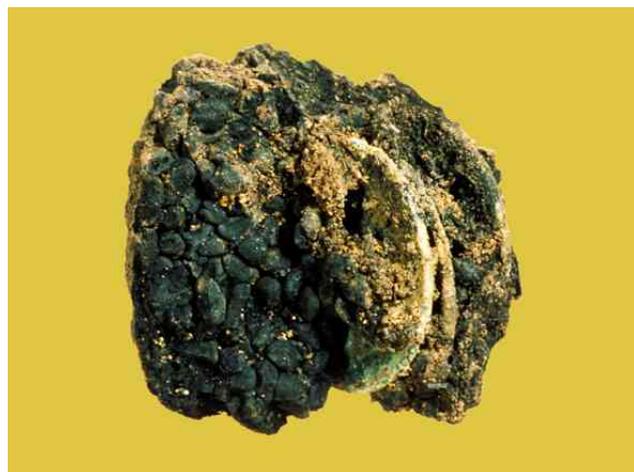
板碑について

板碑は、板石塔婆ともいわれるように石で作った
塔婆で、供養塔の一種です。鎌倉時代終わり頃から
南北朝・室町時代に多く作られています。今は塔婆
というと墓石のそばに立つ木の板製のものを思い浮
かべますが、板碑は、扁平な石を加工したもので、
頭部を三角の山形に、下を尖った形に作ってありま
す。地域によって形状や材料の石に差がありますが、
この地域に通常みられるものは「武蔵型板碑」と呼
ばれる緑泥片岩製のものです。頭部の山形の下は二
条線と呼ばれる2本の溝が彫ってあり、その下の中
央部に仏様を表す文字が梵字(ぼんじ)という字体
で彫られています。仏の文字の下には蓮の花を表す
蓮座があり、さらにその下には仏に供える花瓶が一
つまたは二つ配され、板碑を立てたときの年号や立
てた人の名前などが彫り込まれます。また、板碑を
立てる趣旨や真言という仏をたたえる文句が彫られ
ているものもあります。

上の山遺跡では阿弥陀如来を表すキリークという
文字が1字彫ってあるものがほとんどで、1基だけ
阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩の三尊が彫られ
ているものがありました。年号が読みとれるもので最
も古いのは貞治三(1364)年、最も新しいものは文明
十四(1482)年ですが、1300年代前半の頃と見られ
る古い形をした板碑も含まれていました。



すので、直接つながりがある訳ではありません。しかし、
同じ場所に様々な時代のお墓が作られているのには、何か
特別な意識が、たとえば父祖の地とでもいうような意識が
働いていたのではないかとさえ思えます。それぞれの時代
に生きた人々が死後の場所に対して同じような意識や考え
を持っていたのかもしれない。



銭入りのおにぎり

もっと詳しい内容を知りたい人は発掘調査報告書をご覧
ください。報告書は市内の図書館、横浜市歴史博物館、埋
蔵文化財センターで閲覧できます。また出土品の一部は歴
史博物館常設展示で観ることができます。



遺跡への行き方

京浜急行の生麦駅を下車して改札口を右手に出ます。東海道本線などの線路をまたぐ橋をわたります。階段をおりて右に進むとバス通りに出ます。これを左手に行くと岸谷一丁目公園の角に着きます。ここを右手に曲り坂道をのぼります。さらに、岸谷小学校の前を通り道なりに進むと坂道が右に大きく曲がっています。かなり急な坂ですが、これを上りきると生麦中学校の校門に着きます。校門の左手に貝塚の説明板がみえます。

貝塚はどこにあったのでしょうか

貝塚は標高約40mの四隅が突き出たような舌状の台地の縁に築かれていたようです。学校の北西部の地面をよく見ると貝殻の砕けたものが散っています。体育館とその脇にある階段の付近を注意深く見ると貝殻があります。体育館脇の階段を通り子安台公園に行きます。すぐのところ貝殻が散っています。さらに、右手に行きますと中学校のプールの南の場所に貝殻のあるのが見えます。こうして見ると中学校の縁に貝塚の跡があったようです。



風早台貝塚の説明板

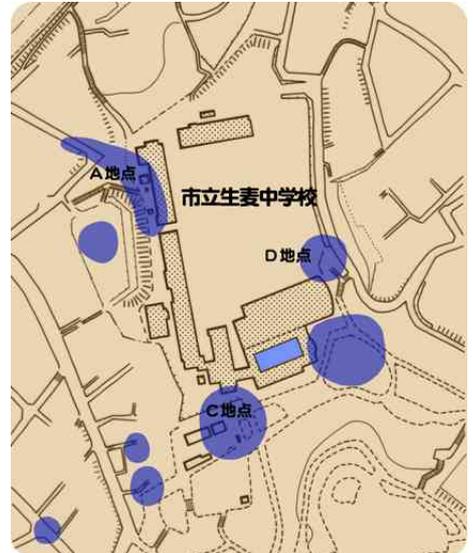
大正時代の発掘調査

1924(大正13)年3月に東大の人類学教室で考古学を学んでいた甲野勇さんは友達の協力を得てこの貝塚を発掘しました。その当時は生見尾村貝塚と呼んでいました。中学校の北西部分にあったA地点とした貝塚を掘り、縄文時代前期の土器、打製石斧やおもりなどの石器、



生麦中学校への入り口

骨でできた針などを発見しました。シカやイノシシの骨とともにカキ・マテガイ・サルボウ・アカニシなどの貝類を採集しています。また、体育館の東脇と階段付近をD地点としています。ここからは縄文土器とハマグリ・マテガイなどの貝類を得ています。中学校のプールの南がC地点にあたります。縄文時代前期の土器、弥生土器などとともにハマグリ・マテガイ・カキ・アカニシなどの貝類を掘り出しています。こうしてみま



貝塚(青の範囲)の推定分布図

すと貝塚は縄文時代前期の中頃に築かれたものと見られます。ここに魚や貝などをとりながら、シカやイノシシを捕まえて暮らす人々が集落を営んでいたことが分かります。

埋蔵文化財センターのご案内

出土品や整理作業のようすを見学できます(予約が必要です)。埋蔵文化財や歴史に関する質問も歓迎します。

開所:午前9時~午後5時。土・日・祝日休み。

交通:東横線「綱島駅」より東急バス1番乗り場「勝田折返所」行終点。田園都市線「江田駅」より東急バス「綱島駅」行「勝田」下車。

ホームページアドレス

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/maibun/index.html>

*「埋文よこはま」は、横浜地域で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。

埋文よこはま 6

発行日 2002年9月30日

編集・発行 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団

埋蔵文化財センター

〒224-0034 横浜市都筑区勝田町 760

TEL 045-593-2406

FAX 045-593-2403